

儀礼喪服篇大功章に見える圧降服に関する一考察

谷 田 孝 之

A Study of 'YA FU' (圧服) in The Chapter 'TA KUNG' (大功)
of The Volume 'SANG FU' (喪服) in 'I LI' (儀礼)

Takayuki TANIDA

緒 言

儀礼喪服篇大功章の公之庶昆弟大夫之庶子為母妻昆弟の条の伝に、何以大功也、先君余尊之所圧云々、とあり、鄭注に、旧読、昆弟在下、其於圧降之義、宜蒙此伝也、是以上而同之、とある。鄭玄以前の旧読は、公之庶昆弟、大夫之庶子、為母妻、伝曰云々、とあったのである。鄭玄は、伝の圧降の義は母妻と昆弟とを受けて述べられたものであるとして、昆弟二字を伝の上においた。然し、旧読がよいか、鄭読がよいかは、なかなか問題があり、ひとり圧降についてばかりでなく、服術上の根本原理の多くに係わりのあるものが含まれている。そこでこれら諸原理究明の一環として、まず両読の何れに従うべきであるかについて考察し、更に圧降服に関係のある喪服上の若干の現象について考察を進めたい。

本 論

I 庶昆弟・庶子の庶について

言うまでもなく、庶は適（嫡）と対するものである。喪服経文においての適子は適長子一人を指すものであり、適婦はその妻、適孫は適子なくして孫が祖を継ぐものである。適に対する庶は、従って適妻の長子を除く衆子をすべて指す。斬衰章の鄭注に、庶子者為父後者之弟也、とあるのがこれである。左伝における適の用語例からすると、適は適妻・適妻の子を言うのであり、庶は適妻の子に対して妾子を言うのである¹⁾。兄弟相続、父子相続、適長子相続の歴史的過程の上からみて、喪服経の適は適々相伝の思想を最も明白に示している。但、劉師培は、喪服経の庶字は、経文及び馬融説によって考えると三義があるものとする。即ち、

1. 正適一人を除くその他、適妻の子、妾子を併せて

庶と称するもの（大功章の庶孫、小功章の庶婦、緦麻章の庶孫の婦）

2. 適妻のみの衆子及び女子子をさすもの（大功章の大夫之妾為君之庶子、小功殤章の大夫之妾為庶子之長殤、小功章の大夫之妾為君之庶子適人者）
3. 妾子及び賤妾の子のみをさすもの（大功章の公之庶昆弟、緦麻章の庶子為父後者為其母）

である²⁾。

1 については問題はない。

2 について、小功殤章の庶子は他の二例と併せ見た場合、君之の二字があるべきことは明らかで、鄭玄が君之庶子としている通りである。馬融³⁾は、除適子一人、其余皆庶子也（中略）不言君者、殤賤、見妾亦得子之也、と言う。君の庶子であるとしていることは認められる。君之庶子が劉氏の言うように適妻のみの衆子であるか、或は妾子をも含むのであるかについては、小功章大夫之妾為君之庶子適人者の馬融注⁴⁾は適夫人庶子とし、大功章大夫之妾云々の伝に、何以大功也、妾為君之党服、得与女君同、とあり、鄭玄は、妾為君之長子亦三年、自為其子期、異於女君也、と言ひ、又、齊衰不杖期章公妾大夫之妾為其子の注に、女君与君一体、唯為長子三年、其余以尊降之、与妾子同也、と言う。鄭玄によれば、女君は長子のために三年、その他は妾子をも含んで尊降する。大夫の妾は、自分の子に対して期であるの他、女君の子及び他妾の子に対して女君と同服をつけるのであるから、君之庶子の中に他妾の子をも含む。王肅⁵⁾も同説である。従って劉氏のこの2は問題である。

3 について、大功章公之庶昆弟大夫之庶子為母妻昆弟の庶とは、適長子を除いてすべての衆子を指すことになるのか、或は妾子のみを指すことになるのか。昆弟については問題があるので、これは後述することに

して、両庶が母妻に対するところの大功服について見ることにしよう。

大功章のこの条の伝は、何以大功也、先君余尊之所庄、不得過大功也、大夫之庶子、則從於大夫而降也、父之所不降、子亦不敢降也、と言う。余尊之庄は父没の庄、大夫に従って降すのは父在る時のみである。ここに庄ということが出ている。これにも亦色々議論があるので、これについては後に詳論することにする。この先君余尊の庄は、公の庶昆弟の場合を述べるものであり、公の庶昆弟は父がすでに没しているが、先君の余尊の作用をうけて、母妻のために大功にしか服することが出来ない。諸侯は旁親の期以下に對し絶服するから、妾・庶子・庶婦に対して無服である⁶⁾。適妻・適子・適婦に対しては、それぞれ齊衰杖期、斬衰、大功に服する。庶子とは適子を除いた衆子、庶婦はこれら衆子の妻である。そこで、適妻の子たる適子とその衆子とは、父たる君が服するところの己の母に、父存すれば齊衰杖期、父亡ければ齊衰三年に服する。然るに今、父没してもなお大功を過ぎるを得ないのは、この母に服するところの庶子が妾子であるからである。喪服記に、公子為其母練冠麻、麻衣緇緣、為其妻緇冠葛經帶、麻衣緇緣とあり、鄭注に、公子、君之庶子也、其或為母、謂妾子也、とあるように、公子が母のために五服外にあるわけは、公子が妾子であり、公が妾に服しないからである。然し、公子が妻のために五服外にあるのは妾子のみでなく、適妻の第二子以下の庶子を含んだものである。父が服しないのはこれら衆子に対してであって、妾子の方に限らないからである。すると、大功章の母妻のために大功に服するところの公の庶昆弟というのは、母のためには妾子であり、妻のためには適妻の第二子以下である。

次に大功章の大夫の庶子の場合、庶子というからには固より父がある場合である。父なる大夫が妾（これに對し總麻又は無服）、適長子を除く庶子（大功）、庶婦（小功）に対するの服は、皆降服であるが故に、適妻の子は母のために降さないが、妾子は己の母なる妾に對し降さざるを得ない。即ち、大功を過ぐるを得ない。妻のために降して大功であるのは、公の庶昆弟の場合と同様に適長子を除いた衆子すべてである。父が没すれば期服を用いる。

そこで、庶には適長子を除くすべてを言う場合だけでなく、妾子だけを言う場合もあることになる（劉氏の1と3とである）。妾子だけを指すのは母のための服を示す必要のある場合だけである。小功殯章の大夫

公之昆弟大夫之子為其昆弟庶子姑姉妹女子子之長殯の鄭注に、公之昆弟不言庶者、此無母服、庶無所見也⁷⁾、とあるのは、母服に関係がないから庶を言わないのであり、母服を示す必要があれば庶と言うのである。

II 庄について

公の庶昆弟及び大夫の庶子が母妻のため大功服をつけることは以上の様で、これについては異論はないが、大功服をつけることが庄降であるとせられるところのその庄は、字義はとも角として、その適用の面では問題がある。特に大功章の経文が旧読の様に母妻のみであるべきか、或は鄭玄に従って母妻昆弟とあるべきかは、庄降とは何であるかがはっきりしなければ決し難い。そこで、まず、庄降とは何であるから考察を進めることにする。

庄（厭）という語の意義については、説文厂部、厭、筭也、の段注に、竹部曰、筭者迫也、此義今人字作壓、乃古今之殊、凡喪服言尊之所厭、皆筭義云々、とあり、朱駿聲は、厭抑双声によって厭降の義を説いている⁸⁾。庄於父、庄於君の用法からして、庄抑、庄迫の意であることが解る。

喪服における庄降の例については、大功章公之庶昆弟云々の伝に、余尊之所庄なる語があり、鄭玄が、旧読昆弟在下、其於庄降之義宜蒙此伝也、と言うが、鄭玄がこの他で庄として注したものとしては、喪服記公子為其母云々の注に、諸侯之妾子庄於父、齊衰不杖期章大夫之適子為妻の注に、降有四品云々公子大夫之子以庄降、礼記服間篇有從有服而無服公子為其妻之父母の注に、凡公子庄於君、降其私親、女君之子不降也（序でながら同篇有從無服而有服公子之妻為公子之外兄弟の疏に、公子被庄、不服己母之外家とある）、礼記喪服小記篇庶子在父之室則為其妻不禫の注に、妾子父在庄也、等がみられる。なお喪服記凡妾為私兄弟如邦人の注の、嫌庄降之の場合は、妾が私親に服する場合に庄降を受けないことを言うものである。

以上は妾子が母妻のために庄降を受けることであるが、これとは別の種類のものとして、斬衰章公士大夫之衆臣為其君布帶繩屨の注に、公卿大夫庄於天子諸侯、故降其衆臣、布帶繩屨、と言うものがある。閻若璩はそこで、君庄臣、父王子を二庄と称している⁹⁾が、庄降の基本形式としては庄於父を挙げるべきである。

公の庶昆弟、大夫の庶子が母妻のために正服するを得ないことの理由は上述した様に、父が己の母妻を尊降するから、己がその庄抑を受けて伸ぶるを得ないの

であって、公の庶昆弟、大夫の庶子の自身の尊を以て降すものではない。圧と降とが誰に向かって作用するかと言えば、喪服記公子為其母云々の注に、諸侯之妾子圧於父、為母不得伸權、とあり、疏に、諸侯絶期已以下無服、公子被圧、不合為母服云々、とあり、礼記喪服小記篇庶子在父之室則為其母不禫の注に、妾子在圧也、疏に、大夫不服賤妾、妾子亦圧而降服以服其母也、とあり、不杖期章の注の降の四品にあっても公子大夫之子以圧降とある等によって、圧は著服する者が蒙るのであり、降は服せられる死者が蒙るのであり、更に言えば、甲は丙を尊降する、故に甲の庶子乙は丙に対して服する時に甲の圧迫を受けて丙を降すのであることが解る¹⁰⁾。斬衰章注に、公卿大夫圧於天子諸侯、故降其衆臣、布帶繩履、とあるが、鄭玄のこの説明は被服者が天子諸侯より圧せられると言っており、公子大夫の庶子たる者（服者）が父より圧せられると言うものと齟齬している。

喪服における圧抑としての圧降の及ぶ範囲はどうであるかという点、鄭玄が示しているものは上掲の如くであり、なお礼記喪服小記篇婦人不為主而杖者姑在為夫杖の注に、姑不圧婦、同篇父不主庶子之喪則孫以杖即位可也の注に、祖不圧孫、孫得伸也、又、大夫降其庶子其孫不降其父の注に、祖不圧孫也、服間篇有從輕而重公子之妻為其皇姑の注に、舅不圧婦也、儀礼喪服記凡妾為私兄弟如邦人の注に、嫌圧降之也、疏に君与女君不圧妾、と言うものが見られる。孟子尽心上篇に、王子有其母死者、其傅為之請數月之喪、公孫丑曰、若此者何如也、とあり、趙注に、丑曰、王之庶夫人死、迫於適夫人、不得行其喪親之數、其傅為請之於君、欲使行數月喪、如之何、とある。迫於適夫人とは適夫人により圧迫せられることであるから、圧降の義である。趙岐は、妾が適妻により圧せられるために妾子とその母のための本服を遂げるを得ないのであると言うものである。儀礼喪服記鄭注が、諸侯之妾子圧於父、為母不得伸、と言うものと一致しない。晋の胡澹の母（妾）の喪において、適母がなお存し、三年なるを得ざるかとの疑問があり、范宣に問うに、范宣が答えて、適母雖貴、然圧降之制、父所不及、婦人無專制之事、豈得引父為比而屈降支子也、と言った¹¹⁾。適母に圧せられることを否定したものである。孔穎達に適母に圧せられるとの説があり¹²⁾、朱子の孟子集註にもかかる説をとり入れている。然し閭閻若墟は六不圧とて、女不圧子、祖不圧孫、舅不圧婦、姑不圧婦、夫不圧妾、女君不圧妾を挙げ¹³⁾、夏變も祖不圧孫、舅不圧婦、男子之圧不

及於婦人と言ひ、非至尊不圧、非至親不圧と言ひ、圧降之界限、尤嚴於尊降也と言ひ、圧降は諸侯の公子と大夫の庶子との兩等にあるのみで、母妻昆弟の如く限られた範囲にあるのみであると言う¹⁴⁾。閭氏、夏氏の述べるところを要するに、庶子が父の圧を受けるのみである。

劉師培は圧例に五ありとし、やや細密に述べている¹⁵⁾。

1. 父尊圧（父在為母）
2. 父為大夫之尊圧（大夫妾子為母妻）
3. 父為諸侯之尊圧（公子為其母練冠）
4. 昆弟為諸侯之尊圧（公之昆弟為其昆弟之長殤）
5. 父為諸侯余尊之圧（公之庶昆弟為母妻）

その他、夫為大夫之尊圧（大夫之妻）と君母之尊圧とを提示しているが、この二つは省略し、1より5までを主として検討することにする。

1については、齊衰杖期章父在為母の伝に、何以期也、屈也、とあり、劉氏はこの屈を圧と見るのである。鄭玄はこの屈を圧とは積かないが、賈疏は、由父在圧故為母屈至期と言う。なお、伝は、至尊在、不敢伸其私尊也、とて父を至尊と称してはいるが、父が子の母を降すが故に子が従って降すものではない。故に尊降より来るところの圧降ではない。夫が適妻を降すことはないから、適子が圧を受けることもない。夏變が適子に圧降なしと言う通りである¹⁶⁾。馬融は、屈者子自屈於父、故周而除母服也、父至尊、子不敢伸母服三年、と言う¹⁷⁾。圧降と屈降とこの様な相違があるが、もし圧と屈とを混じて區別を設けないとすれば、劉氏のように圧例の中に屈を入れることも出来よう。不杖期章の鄭注の降四品説の疏に圧屈の語があり、顧炎武は余尊の圧を釈くのに晋書志十の、哀帝章皇太妃薨、帝欲服重、江彭啓、先王制礼応在細服、詔欲降期、彭又啓、圧屈私情、所以上嚴祖考、於是制細麻三月、を引いている¹⁸⁾。

2の父為大夫之尊圧として、劉氏は小功殤章大夫公之昆弟大夫之子為其昆弟庶子姑姉妹女子子之長殤と大功章伝の大夫庶子従於大夫而降を挙げる。大夫がその昆弟、庶子、姑姉妹女子子の長殤のために小功殤に服するのは、まず、大夫はその昆弟以下を尊降する上に、それらの長殤に対し一等を降すからである。小功殤章の鄭注に、大夫之子不言庶者、閔適子、亦服此殤也、とあるように、昆弟以下の長殤に対し、適子も庶子も同じ服に服する。但し、何故適庶同服であるかについては、大夫適子の場合と大夫庶子の場合と、別々の理

由がある。大夫の子は適子とそれ以外の庶子とに分けられる。不杖期章に大夫之庶子為適昆弟、大功殯章に大夫之庶子為適昆弟之長殯中殯、小功殯章に大夫之庶子為適昆弟之下殯とあるが、適昆弟とは適子たる昆弟である。適子と言わないで適昆弟と言ったのは大夫の庶子にとってこの適子が兄である場合も弟である場合もあるからである。要するに大夫の子は適子と庶子とに分けられる。両者は喪服の上で大きな相違がある。父たる大夫は適子を降さないが、庶子が士である場合は之を降して大功服とする。又、適婦を降さないで大功服であるが庶婦は降して小功服とする。大夫の適子は妻を降さないが庶子は父あるときは妻を降して大功服とする。即ち大夫の庶子は父あるの圧を受けるが大夫の適子は圧を受けない。不杖期章の大夫之庶子為適昆弟の伝に、何以期也、父之所不降、子亦不敢降也、とあり、鄭注に、大夫雖尊、不敢降其適也、重之也、適子為庶昆弟、庶昆弟相為、亦如大夫為之、とあり、賈疏に、大夫適子得行大夫礼、故父子俱降庶、とある。以上によって見ると、大夫の子がその昆弟庶子等を降すとは言っても、適子の降は己が大夫の礼によって尊降するのであり、庶子の降は父尊による圧降である。但、父尊による降がすべて圧降であるか否かは、なお検討を要するところであり、特に昆弟に対する降が圧降であるかどうか議論の生ずるところである。

3の父為諸侯之尊圧について、劉氏は喪服記の公子為其母練冠云々の条を挙げることににおいては問題はない。但、馬融が大功章公之庶昆弟大夫之庶子について、諸侯貴妾の子、大夫貴妾の子が、父在為母周とする¹⁹⁾のは疑問である。

4の昆弟為諸侯之尊圧については、劉氏は小功殯章の公之昆弟為其昆弟庶子姉妹女子子之長殯を挙げる。この章の馬融注²⁰⁾に、大夫以尊降、公之昆弟以尊厭、大夫子以父尊圧とあり、公の昆弟の圧を言う。その尊圧の尊が誰であるかと言うと、劉氏は、いやしくも圧が自らの尊によるものでない以上、公の昆弟が受ける圧は、先君の尊か今君の尊かのどちらかであるが、馬融が父尊とも余尊とも称しない以上は、今君の尊の他にはない、と考える。然し、劉氏のこの考えには問題があり、大夫の子にあっては、伝に、父所不降、子亦不敢降、と言ひ、公の子にあっては、君之所為服、子亦不敢不服也、君之所不服、子亦不敢服也、と言って、公と子との関係を示しており、公と昆弟との関係についてではない。更に、公の昆弟の尊圧があるとしても、公の庶昆弟の余尊の圧との関係はどうであるかが問題

となる。これについては次に更めて述べる。なお、齊衰不杖期章鄭注降四品の中において、鄭玄は、公之昆弟以旁尊降、と言っており、公の昆弟について旁尊とは言うも圧降とは言っていない。

5の父為諸侯余尊之圧については固より大功章の公之庶昆弟為母妻、伝の先君余尊之所圧が抛となるところのものである。劉氏は前項に掲げた馬融説によって、公之昆弟圧於今公之尊、非圧於先君之尊、与公之庶昆弟圧於先君余尊者、所厭不同、と言ひ、公の昆弟と公の庶昆弟と、圧が不同であると見る。公の昆弟の圧は今君の尊に由る圧で、昆弟庶子等に及ぶが、公の庶昆弟の圧は先君余尊に由る圧で、母妻に及ぶのみとするのである。それでは公の昆弟と公の庶昆弟とはどう違うのであるか。

まず公の昆弟について、劉氏は、春秋において陳侯弟黃、衛侯兄縶等の称は、諸侯の適昆弟（共に適妻の子）である。そしてそれが今君に繋いで尊とせられることについては、杜預²¹⁾が引用するところの先儒説に、称弟、皆謂公子不為大夫者、得以君為尊、とあるものや、公羊伝（昭公二十年衛侯之兄縶の条）何休解詁に、公子不言之、兄弟言之者、敵体辞、と言うのによって知られる。今君に繋いで尊とせられるのであるが故に、今君の圧を受け、今君の服せざる所においては亦服せざるところがある。

公の庶昆弟ならば、春秋において諸侯妾子は父在父没ともに公子と称するのであり、諸侯同母弟が父没し弟と称するものと違う。更に喪服伝では、公の庶昆弟にあって先君余尊の圧と言う。だから今君に繋いで尊と為るを得ないのであり、先君がすでに没しても、先君の服せざるものに対して本服をつけるを得ないのである。

上の如く、劉氏は公の昆弟と公の庶昆弟とを区別して、公の同母昆弟と公の異母昆弟（妾子）との相違であると言う。これについて、まず、公の昆弟が公の尊圧を受けて、今君の服せざる所において亦服せざるところがあるということについては、公尊の圧する所となるとは言っても、公の服せざる所、昆弟が悉く服しないというわけではない。伝も、君所不服、子亦不敢服、と言うのであって、昆弟不服と言うのではない。子なら服しないのであるが、昆弟ならば旁親及び子の尊不同者に対して一等を降すだけである。

次に、劉氏は、先に挙げた様に、経の庶字について三義ありとし、1.正適一人を除いて適妻衆子及び妾子を称するもの、2.適妻の子（男女とも）だけを称する

もの、3.妾子だけを称するもの、を挙げる。すると、大功章の公の庶昆弟は3に相当するものである。然し公の庶昆弟の称は果して必ず妾子のみを言うものであろうか。前に触れたように左伝において適は適妻であり、適子は適妻の子である。然し儀礼喪服篇においては適長子一人を適子とし、他は庶子と言うのであり²²⁾、大功章において公の庶昆弟と言うわけは、特にその母が先君の妾であることを示すためである²³⁾。公の昆弟と公の庶昆弟の別が常に適妻の子と妾子との別にあるわけではない。公の庶昆弟の語は大功章のこの条にあるだけで、他は皆、公の昆弟と称する。即ち

大功章、大夫、大夫之妻、公之昆弟、為姑姉妹女子子嫁於大夫者

小功殯章、大夫、公之昆弟、大夫之子、為其昆弟庶子姑姉妹之長殯

小功章、大夫、大夫之子、公之昆弟、為從父昆弟庶孫姑姉妹女子子適士者

である。此等公の昆弟が公の同母昆弟であるのか、又は異母昆弟をも含むかについて、先に挙げた小功殯章の鄭注にあるように、公の昆弟を特に庶と言う場合は、その母が妾であり、この母に対する服を示す必要がある時だけで、母服に関係がない時は公の昆弟の中に公の同母昆弟も異母昆弟も含まれる。馬融は大功章公之庶昆弟云々に注して、庶者諸侯異母兄弟也、庶子大夫妾子也、と言うが、上掲の公の昆弟に注しては同母異母の別は示していない²⁴⁾。又、父よりすれば適子を除いては適妻の子と妾子とに対する服は異ならない。適妻は夫と一体なる故、亦衆子に対し夫と同じである。不杖期章公妾大夫之妻為其子の伝の注に、女君与君一体、唯為長子三年、其余以尊降之、与妾子同也、どあるのがこれである。衆子も父及び適妻なる母に対し、適妻の子と妾子との区別がない。唯、妾は夫君と一体でないために、公妾大夫の妾ともにその子のために不杖期の本服を遂げることが出来（その他の君の庶子に対しては女君と同じである）、妾子は母のためには厭降し、適妻の子は母のためには本服をつける。上の様であれば、喪服において公の昆弟と公の庶昆弟と、その称谓は公よりして同母弟異母弟の区別をするためのものではない。適妻の子と妾子との区別が為されるのは母に称しての服だけである。妻に対する場合の区別は、適子とその他の衆子との別である。従って公の昆弟を今君の尊圧又は旁尊降、公の庶昆弟を余尊の厭として区別することは誤りである。

III 公の昆弟が昆弟に対する圧降について

1. 公の昆弟における旁尊降と余尊の圧

齊衰不杖期章の大夫之適子為妻の条の注に降四品説があり、その中に公子、大夫の子における圧降と公の昆弟における旁尊降とがある。旁尊降が誰に対してであるかについて鄭玄は明示していない。厭降は大功章の公の庶昆弟及び大夫の庶子がその母妻昆弟に対するものである（昆弟に対しては後述）ことは明らかである。同条賈疏は旁尊降の例として小功章の公之昆弟為從父昆弟を挙げ、又、大功章公之庶昆弟云々の伝の先君余尊之圧を挙げて、若然、公之昆弟有兩義、既以旁尊、又為余尊圧、と言う。これによれば同じ公の昆弟に旁尊降と余尊圧降とがあるのであり、旁尊降を為すものと余尊圧降を為すものと別の二人であるのではない。公の昆弟に旁尊降と余尊の圧降とがあるのならば、どんな場合に旁尊降があり、どんな場合に圧降があるのか。賈公彦の示すところは上述の通りであるが、馬融は、その昆弟庶子姑姉妹女子子の長殯に対するものは尊圧、從父昆弟庶孫に対するものは尊降と言う²⁵⁾。賈公彦は馬融に基いたのである。夏變も公の昆弟の旁尊の例は從父昆弟より始まるのであり、それより近い母妻昆弟に対しては余尊の圧であると言う²⁶⁾。從父昆弟に対しては、己が旁尊たるにより降し、昆弟に対しては、父尊により圧降する、と言うのである。それでは、喪服篇の諸条から、公の昆弟が昆弟に対して、果して圧降することが証明せられるか。

2. 公の昆弟がつける服と大夫尊降服との類似

公の昆弟がつける服は、母妻昆弟（昆弟については後述）及び從父昆弟の大夫たる者に対する大功服、姑姉妹女子子の大夫に嫁する者に対する大功服、昆弟庶子姑姉妹女子子の長殯に対する小功殯服、從父昆弟・庶孫に対する小功服、姑姉妹女子子の士に適く者に対する小功服である。これ等に対する服は、母妻に対するものを除いて、皆大夫がするのと同じく本服を一等降したものである。鄭玄が、云公之昆弟為庶子之長殯、則知公之昆弟猶大夫、と言う（小功殯章）如く、公の昆弟の身分は大夫と同じであるが故に、昆弟、從父昆弟に対し一等を降しているものと見られる。從父昆弟に対しては、その士の身分の者に対しては尊降して小功服であるが、大夫の身分に対しては尊降は及ばないで大功服である。士たる者に対する降服は己が公の旁尊である²⁷⁾からであるが、旁尊とはいえ尊同者（公の昆弟と同じ大夫の身分）には尊は及んでいない。從

父昆弟に対しては明らかであるが、公の昆弟が成人昆弟に対し一等を降すことについては大功章の本条の母妻昆弟とあるのみで、他には明証がない。関係喪服文によって略類推可能であるだけである。従父昆弟に対する場合と同じく、昆弟の士たる者に対し降すことは固よりであるが、大夫の身分の者に対しては圧降は及ぶのか及ばないのか明白でない。鄭玄が唯昆弟に対する圧降のみを言っていることより推測すると、鄭玄は大夫たる者にもこれが及ぶと見たかと思われる。然し、大功章によると、姑姉妹女子子の大夫に嫁する者に対し、公の昆弟は尊同の故を以て、尊降はせずして出降しているだけである。ここで、公の昆弟が大夫昆弟に対する服を更に検討して見る。

3. 公の昆弟が大夫昆弟に対する服

鄭玄の言うところでは、旧読は昆弟が下にあった。鄭玄は、昆弟は伝の言うところの圧降の義を蒙るべきものと考えて昆弟を母妻の下に属せしめたのであるから、昆弟が伝の下にあった旧読においては、昆弟は圧降に関係がないことになる。そして喪服経の前後の条に照らしてその様な解釈も可能である。先君は庶子に対し無服であったし、今君も昆弟に対し無服であるから、公の昆弟もその昆弟に対し圧降を受けると見ることが出来よう。もっとも馬融も公の昆弟がその昆弟庶子等の長殤に対する小功殤服を尊圧とするから²⁸⁾、旧読が昆弟に対する圧降を全く無視したとは言えない。母妻に連属せしめなければ圧降の義が顕われないというわけでもない。然し昆弟大夫服に対し親服を用いるとの見方も可能なのである。

昆弟に対する公の庶昆弟、大夫の庶子の服が大功章の此処にあっては不都合であるとの理由として諸家の述べるところは色々あるが、まず公の庶昆弟及び大夫庶子の、その昆弟に対する服は、大功章のこの条の直上の経文によって示されているとの説である。これについては程瑤田の述べるところ²⁹⁾が最も詳密である様だから、その要旨を下に挙げて見よう。

大功章のこの条の直上の経文に、大夫為世父母叔父母子昆弟昆弟之子為士者、とあり、伝文に、何以大功也、尊不同也、尊同則得服其親服、とあるが、大夫が此等の人々の殤死した者に対する服が小功殤章にあり、それには、大夫、公之昆弟、大夫之子、為其昆弟庶子姑姉妹女子子之長殤、とある。大功章大夫服経文には世叔父母があるのに小功殤章大夫服云々にはないが、喪服経文で世叔父母に対する殤服（大功殤章、叔父之長殤中殤、小功殤章、叔父之下殤）は叔父の方にのみ

あり、小功殤章大夫の条は叔父の殤服をも省略したにすぎない。又、大功章大夫服に姑姉妹女子子に対する服がないが、それは世叔父母を以て姑を包み、昆弟を以て姉妹を包み、子を以て女子子を包んだものである。そこでこの二つの経文の関係から、大功章大夫服の中には服者として公の昆弟、大夫の子が含まれていると言うことが出来る。だから、公之庶昆弟大夫之庶子為母妻云々、の条は専ら母妻のための服を著したものであり、昆弟に対するものは上条大夫服において示されている。公の庶昆弟、大夫の庶子が昆弟のためにつける服というのは、公の庶昆弟の場合、公子（先君あり）その昆弟に対しては母妻のための様な五服外の服はない。先君没すれば、今君の庶昆弟は昆弟の士たる者には上条の大功服、昆弟の大夫たる者には大功章大夫服の伝文にある通りの尊同の親服である。大夫の庶子の場合、昆弟に対し大夫に従って服するので上条の大夫服中に包まれる。公の庶昆弟、大夫の庶子の中に別出する必要はない。適昆弟に対する服は喪服経に備わっている。衆昆弟に対する服は経に見えないが、適昆弟に対する服との差等によって判断出来るし、上条の大夫服からも判断出来る。大夫の子は適庶ともにその衆昆弟成人のため大功、長殤には小功である。上条大夫服中の昆弟は士である。本条の下にある従父昆弟は大夫たる者である。今両条の中間の母妻の条において、爵の不明な昆弟があるのは明らかに誤りである。

程瑤田が、公の庶昆弟、大夫の庶子のその昆弟に対する服がこの条に必要なしとする理由は、喪服経互見互省の例によってこの条になくても充分に判断出来るとするにあるが、この事だけを以てして昆弟が此処にあることが誤りであるとはせられぬ。陳寿祺は、喪服経に大夫、大夫の子、公の昆弟の三者の服は最も備わっているとし、経に互見互省の例が多いからといって、母妻の条の昆弟を除去するわけにはいかぬと言う³⁰⁾。公の昆弟、大夫の子が昆弟に対する服は喪服経の他条から判断出来るとしても、母妻の下に連属することがこれだけで誤りであるとはせられないことは陳寿祺の言う通りである。問題は昆弟に対する服の内容である。それが士である場合、これに対して大功服であることは問題ないが、大夫である場合、程瑤田の言う様に果して親服であるのか、或は降服大功であるのかは明らかでない。程瑤田と同説であるのは徐乾学であるが³¹⁾、その他多くの学者は、公の庶昆弟が昆弟大夫に対しては余尊の圧によって親服たるを得ないのであると言う。敖繼公は、母妻及昆弟之尊同者、若不宜

降、而此二人降之云々、と言うが³²⁾、大夫の子が降するのは昆弟士だけである。公の昆弟が大夫たる昆弟を降すかどうか、疑問が解消するわけではない。

4. 大功章本条における庶の存在意義

大夫の子が衆昆弟に対する服は程瑤田の言う様に適庶ともに成人ならば大功、長殤には小功である。適長子と庶子との間、或は適妻の子と妾子との間において、それらの昆弟に対する服に差等があるのなら大功章の本条で母妻昆弟とあることに問題ないが、それらの服に差がないならば大夫庶子のみが圧降であるという理由が成立しない。鄭玄は不杖期章大夫之庶子為適昆弟の注で、適子為庶昆弟、庶昆弟相為、亦如大夫為之、と言う。公の昆弟の場合では、その昆弟が大夫である場合の服について異説があり、その何れが是であるか決定する明白な根拠がないが、公の同母昆弟も異母昆弟も、昆弟に対する服に差がなければ、ここにおいても母妻の下に昆弟がおかれる理由がない。喪服経で「大夫之庶子」の称は大功章の本条の他に、なお、大夫之庶子為適昆弟（不杖期章）、大夫之庶子為適昆弟之長殤中殤（大功殤章）、大夫之庶子為適昆弟之下殤（小功殤章）があるが、「公之庶昆弟」の称は大功章本条に一見するのみである。小功殤章公之昆弟大夫之子為其昆弟之長殤の鄭注にも、公之昆弟不言庶、無母服、とある。この事からして特に公の庶昆弟としてその昆弟に対する圧服をここで著す必要は喪服の差等の上からは認められない。

かくて公の庶昆弟、大夫の庶子が母妻昆弟に対して大功服であるとした場合、庶昆弟・庶子の庶が非常に不確定な、否、むしろ無意味なものになって了うのである。母に対するの服が大功服であるのは、公の庶昆弟、大夫の庶子、ともに妾子である。庶子とは適妻の第二子以下及び妾子であるが、母のためには適妻の子は全て正服であるから、今は妾子のみである。ただ、公の庶昆弟の場合は、父ある時は無服（父が無服であるから）、父没してはじめて大功であり、大夫庶子の場合は、父ある時大功（父が降すから）、父没すれば正服をつけることが出来る。妻に対するの服が大功であるのは、適子を除いて衆子であり、適妻の子でも第二子以下は大功婦である。諸侯は適子の妻を降さないだけで、他の庶婦に対しては無服であり、大夫は尊降するからである。母の場合と同じく公の庶昆弟は父没してはじめて大功服、大夫の庶子は父存する時大功服である。母と妻とに対して公の庶昆弟、大夫の庶子が大功服であるとは言っても、母に対する場合の庶と妻

に対する場合の庶には相違がある。なお、母妻に対するこの圧降服は喪服記の公子為母云々、為妻云々の記事と即応するものである。以上の様に母妻のための服として庶字の意義は重要である。然るに昆弟に対する服にあっては母妻のための場合と更に違うところがある。公の昆弟の場合、その昆弟に対し先君は無服であったから公子亦無服であり、先君没して今君もそれに対して無服であるから公の昆弟は大功であるが、これは公の同母昆弟たると異母昆弟たるとを問わない。公の昆弟が余尊の圧によって昆弟大夫たる者をも降すのであるとしても、公の同母昆弟が降さないものを異母昆弟が降すということはあり得ない。さすれば「公の庶昆弟」と庶を冠する必要は昆弟に関しては認められないのである。大夫の子の場合は、大夫が庶子を降すから適子庶子ともに昆弟の士たる者を降す（昆弟の大夫たる者に対しては期服であることは前条に照らして明白である）。すると昆弟のための大功服は、大夫の子にあっては昆弟の士たる者のみにこれと言えるのであり、しかも独り庶子のみでなく、適子でさえも含まれるのであり、益々「庶子」と称する必要がないし、圧降もあり得ない。

5. 昆弟は私親ではない

礼記服間篇の有従有服而無服公子為其妻之父母の注の、凡公子圧於君、降其私親、女君之子不降也、や、喪服小記篇の庶子在父之室則其妻不禫也の注の、妾子父在圧也、等を見ても、圧を受けるのは妾子又は庶子等で、圧によって降を受けるのはそれらの私親である。私親とは上掲服間注の妾子にとってその妻、儀礼齊衰杖期章の伝の言うところの出妻の子にとってその母、緦麻章伝の庶子為父後者にとってその母、大功章鄭注の妾にとってその親族、等によって知られる。程瑤田は、公子が母妻のため五服外の圧服をつけるが、昆弟のために五服外の服をつけることを記したものが無いし、昆弟をもって私親と言うことは出来ぬと言³³⁾、陳寿祺も昆弟は私親に非ず、圧服は昆弟に及ばずと言っている³⁴⁾。妾の子の相互関係にあって、彼等は母は妾であっても皆同じ父の子であり、互に父に従って降すとは言っても、私親とは見做されない。馬融等の旧説が昆弟を母妻から切り離して下においた理由は以上述べたところからも察せられる。

6. 旧説において昆弟が下にあること

それでは旧説が昆弟を下においたとせられるところの、その下とはどこであるか。鄭注は唯、下に在ったと言うだけだが、賈疏は伝下と言う。伝下とは凌廷堪

は、伝曰之下也、蓋旧読伝曰昆弟何以大功也、其義原可兩通、近人有以昆弟二字属下節經文之首者、則讀之不可通矣、と言う³⁵⁾。後述の如く下節に属して通じないことは凌氏説の通りであるが、伝が昆弟何以大功也と言う以上、昆弟は固より經文中になければならず、經文中の昆弟とは公の庶昆弟しかないから、昆弟何以大功也とは、公の庶昆弟が母妻のために何以大功也と問うたものである。然し若し左様であるならば鄭玄がこれを訂正する筈はない。鄭注によればこの昆弟は服者たる公の庶昆弟とは別の人である。伝下にあったのなら伝文の下で、皆為云々の上にあった。この場合、昆弟と皆為云々とは連属して一条を為すか、又は昆弟と皆為云々とは別条を為すものであるか、の二つが考えられる。程瑤田は先に述べた理由から昆弟を伝下においたが、皆の上に何かの服者が無ければならぬから、昆弟皆為云々を一条とした³⁶⁾。これについて陳寿祺は、従父昆弟のために服するのは固より従父昆弟である、もし昆弟皆為云々であるとするれば、昆弟為従祖昆弟、昆弟為族昆弟等と言わねばならぬ様になるが、その様な例は喪服篇の中にない、と反駁している³⁷⁾。昆弟が皆為云々とは別の条であるとして、昆弟に対する服は齊衰不杖期であるから、今、本条に大功の昆弟がある以上、昆弟のために服する者は公の庶昆弟、大夫の庶子でなければならない。公の庶昆弟、大夫の庶子が昆弟に対するの服は前述の通りである。然し伝下にあるのであれば、圧降に無関係となる。それならば一層庶字は無意味となる。鄭玄は、皆者言其相為服、尊同則不相降、其為士者降在小功、適子為之亦如之、と言う。誰と誰とが相互に服するのかを明言しないが、公の庶昆弟、大夫の庶子を承けて、それらが皆その従父昆弟の大夫たる者に大功に服するとの意味であるに相違ない。賈疏は、此文承上公之庶昆弟大夫之庶子之下、則是二人為従父昆弟之為大夫者、と言ひ、更に、鄭玄互相為服者、以彼此相為、同是従父昆弟相為著服、故云皆互、相見之義故也、と言う。疏が鄭玄を釈くに明白を欠く節がある。後半の部分を見れば、これは従父昆弟相互と釈いているのであるが、もし左様であるならば、昆弟や従祖昆弟や族昆弟等のための服はすべて皆を冠ししなければならないことになる。鄭玄の意図は、皆とは相互に大夫であることを示すための字であると思われる³⁸⁾。ともあれ、従父昆弟のために服するものが上の二人であるに相違ないが、敖繼公はこの二人の他に更に上条の大夫をも加えて皆としたのであると言う³⁹⁾。確かに昆弟に対する服として公の庶昆弟（公の

昆弟に同じ）大夫の庶子（大夫の子に同じ）のものは上条の大夫のものに同じである。とすれば従父昆弟の大夫なる者に対する服も三者同じである。小功章に正に、大夫、大夫之子、公之昆弟為従父昆弟庶孫姑姉妹女子子之適士者、とある。呉家寶⁴⁰⁾、胡培翬⁴¹⁾、曹元弼⁴²⁾、張錫恭⁴³⁾等が敖氏説を支持している。昆弟を皆の上においた程瑤田でさえも実は敖氏説を認めているのである⁴⁴⁾。

皆が上を承けていることは勿論のことであるが、ここに問題がある。それは旧読において昆弟が伝下にあったのであるが、昆弟皆為云々が連属した一条であることはあり得ない（従父昆弟のために服するものは昆弟ではなくて従父昆弟である。上述の如く凌廷堪も昆弟皆為云々は意味が通じないとして、伝曰昆弟何以云々とすべしと言っている）から、昆弟と皆為云々とは別条であり、昆弟のために服するものが上になければならず、それは公の庶昆弟と大夫の庶子でなければならない。すると昆弟のために服する者と従父昆弟為大夫者に服する者とは同じ公の庶昆弟と大夫の庶子である。さすれば皆為「昆弟」「従父昆弟為大夫者」とあるべきである。然るに經文は従父昆弟のみに皆が冠せられる。

7. 以上の様に見て来ると、昆弟二字は母妻の下においてであれ、伝下においてであれ、納得のいく説明は得難い。程瑤田は、昆弟服は圧降でないとの理由で旧読に従って下条の上においたが、たとえば下条に属せしめたにしても、上条大夫服あるによって必要がないとするのであれば、下条に属せしめたところで同じことである。これについて程瑤田も勿論承知しているのであって、細檢全經、不合服例、昆弟二字苟非衍文、且従旧読属下、猶為彼善於比者也、と昆弟の所在の不安定性を表明している⁴⁵⁾。陳寿祺は程氏の読みの昆弟皆云々を俗読として斥け、鄭注、賈疏の言う旧読は、經を公之庶昆弟云々、昆弟、皆為云々の三つに分かつものであり、昆弟には圧降の義は及ばないとしながらも、昆弟二字は旧読に従うも可、鄭読に従うも可とし⁴⁶⁾、胡培翬に至っては、昆弟をはっきりと衍文なりとしている⁴⁷⁾。凌廷堪は上述の様に、伝曰昆弟何以云云としているが、もしその昆弟は公の庶昆弟のことで、伝は「公之庶昆弟何以云々、大夫之庶子則云々」とて、公の庶昆弟と大夫の庶子とが母妻に対する服において相違があることを述べたものであると見ることが可能ならば問題は解決することになるが、旧読も鄭玄が、昆弟を被服者とする以上、両者何れが是であるとも決

しかねるのである。とも角、昆弟二字は甚だ厄介な存在であり、近年出土の武威漢簡⁴⁸⁾の喪服三本中、所謂甲乙二本は経伝ともにあるものであるが、これには昆弟二字も皆為云々もなく、独り丙本は経文のみであるが、母妻昆弟皆為「其従父昆」(四字欠) 弟之為大夫者となっている。

IV 妾不圧と婦不圧について

本稿のはじめに述べたように、圧降の及ぶ範囲は極めて限られており、公子、大夫庶子が母妻に対するもののみと思われる。その反面で不圧とせられるものが若干数ある。そして圧降服を一層はっきり理解するためには不圧服についても認識する必要がある。そこでまず不圧中の妾不圧及び婦不圧について考察することにする。

1. 喪服記の凡妾為私兄弟如邦人の注に、嫌圧降之也、とあり、疏に、君と女君不圧妾とある。妾不圧は上述の公子・大夫庶子の母妻のための圧との関係において、家族制度上、極めて重要な意義をもつものである。妾子はその母のため圧降するのに、妾は何故にその子に対して本来の服を以て遂げることが出来るのであるかを明白にする必要がある。

イ. 妾がその子のためにどのような服をつけるかという、不杖期章に、公妾大夫之妾為其子、とあり、伝に、何以期也、妾不得体君、為其子得遂也、とあり、鄭注に、此言、二妾不得従於女君尊降其子也、女君と君一体、唯為長子三年、其余以尊降之、与妾同也、とある。これに関連して、妾が君の党のためと女君の党のための服については、大功章に、大夫之妾為君之庶子女子子嫁者未嫁者、とあり(旧説に従う)、伝に、何以大功也、妾為女君之党服、得与女君同、とあり、礼記雜記上篇に、女君死則為女君之党服、とある。これ等によって知られる如く、女君は君と同じく長子のために三年服であるの他は、衆子(女君の子も妾子も)を尊降する。即ち諸侯夫人は無服、大夫の妻は大功である。妾は君の長子衆子に対しては女君に従って服するのであるから、長子のため三年、女君の衆子及び己の子に対して、女君に従って公妾なら無服、大夫の妾なら大功であるべきであるのに、今、己の子に対しては不杖期である。その理由は、己の子に対して女君と同じくすれば、己が君と一体となって適と並ぶかの様であるからである。この事について、敖繼公は伝・注を敷衍して、妻与夫一体而従之、故不問己子与妾子、其為服若不服亦然、二妾於君之子、亦従於其君

而為之、其為服若不服、皆与女君同、惟其子得遂、独与女君異者、以不得体君故也、蓋母之於子、本有期服、初不因君而有之、故不得体君則此服無従君之義、是以得遂也、と言っており⁴⁹⁾、褚寅亮も、此正解注不得従女君尊降其子之義、極明哲、と評している⁵⁰⁾(敖氏が妾於君之子、亦従於其君而為之と言うことについては、張錫恭の言う様⁵¹⁾に當に 従於女君而為之に改めるべきであろう)。妾がその子に対し期の本服を服する理由が君に体するを得ざるが故であるとの伝の意は一応これで解る。

さて、妾がその子に対して、君と一体となり得ず、従って女君と対等になり得ざるが故に、その子を尊降することが出来ないで、本服の不杖期に服する。ところが妾子は、士の妾子は別として、母のため本服に服することが出来ないで、公子は、父あれば五服外、父没すれば大功、大夫の庶子は、父あれば大功、父没してはじめて齊衰三年である。公子も大夫庶子も父に従って服する。妾母が子に対して本服を遂げることが出来るのに、その子が母のために降服することは、理においても情においても順当でなく、大きな背理性を感じしめるものであり、服制上の問題である。女君も妾も父母のために遂げるを得るのに、妾子が母を降すことは一見では甚だ不可解である。母のための降服は所謂圧降服である。圧降は己の尊によってではなく、父が降すによって己も降すものである。妾も妾子も共に母及び女君より降されるのであるから、妾子が母に対して受けるのなら妾母も子に対する圧降を受けることは理にも情にもかなったことではないか。ところが妾は圧を受けない。この一見背理的服制が生ずる理由についての伝の説明は上述の通りであるが、更にその根底にあるところの家族、親族上の制度を考えて見る必要がある。

ロ. 妾における不体君と適における体君

先に述べた様に、妾がその子のために期に服する理由について、伝は妾不得体君と言うが、同じ様なことが不杖期章の公妾以及士妾為其父母の伝にあり、何以期也、妾不得体君、得為其父母遂也、と言う。君と一体となるを得ないが故にその子並びにその父母のために遂げるを得ると言うのであれば、鄭玄がその注で、然則女君有以尊降其父母者与、春秋之義、雖為天王后、猶曰吾季姜、是言子尊不加於父母、此伝似誤矣、と言うのも尤もの様である。敖繼公も、妾以不得体君之故而遂其服者、惟自為其子耳、若其私親則無与於不体君之義、伝義似誤也、と言う⁵²⁾。女君が君と一体なる故

に尊降するのは、不杖期章公妾大夫之妾為其子の鄭注に、女君与君一体、唯為長子三年、其余以尊降之、与妾子同也、とあるもの、及び、喪服記凡妾為私兄弟如邦人の鄭注に、然則女君有以尊降其兄弟者云々、とあるものであって、その父母に対しては子の尊は及ばない。妾が不体君であるので遂げるを得るのは、その子と私兄弟のためとてあって、父母に対しては不体君の故ではない。故に不杖期章公妾以及士妾為其父母の伝が、妾不得体君、得為其父母遂也、と言うのは、伝を程瑤田の様に弁護する（後述）者はあっても、それが誤解を招き易い表現であることは否めない。女君は君と一体、而もその父母を降さず、これは適子は君と一体であるからとて外祖父母を降すことがない（礼記服間篇有従有服而無服公子為其妻之父母の注に、凡公子庄於君、降其私親、女君之子不降、とある）のと同じである。然し庶子は父後となれば母のため總麻、外祖父母・舅・従母のために無服である。すると妾が女君を撰ずる場合には、それが子や父母に対する服はどうか。程瑤田は父母の服を絶つと言うが⁵³⁾、これは大いに疑問である。程氏は、女君が君と体するからその父母を降す、という様なことは経文にも見えないところであり、伝がその様に言う筈はないから、妾不得体君、得為其子遂也、や、……得為其父母遂也、とは鄭玄が反駁している様な女君との比例の上で斯く述べたのではなく、妾子との類比の上で述べられたものである、と言う⁵⁴⁾。即ち、妾子が父後となる（尊者と一体となる）時、その母のために本服を遂げるを得ず（程瑤田は、不遂とは絶服のことであるという）、又、外祖父母のためには服がない。これによると、妾子は本来尊者に体せざる故に母のために遂げることが出来る。但、庄によって降す（公子庄降は總麻よりも重く、大夫庶子が大功であるのも同様である。父の没後であれば、更に伸ばすことが出来る。士であれば父が在る時でも本服である）。然し妾と妾子とが比例すると言う程氏説には承服し難い。適妻ははじめから体君であって、不体君の例はない。又、妾ははじめより不体君である。鄭玄の駁五經異義にも、礼喪服父為長子三年、以将伝主故也、衆子則為之期、明無二適也、女君卒繼室撰其事耳、不復立為夫人云々、とある⁵⁵⁾。不体君であるが故に遂げることが出来る。妾子が体君、不体君の二つがあるのとは異なる。總麻章の貴臣貴妾が鄭注の言う様に公士大夫のそれであるのか、或は敖繼公の言う様に士のそれであるのかの議論は措いて、とに角、妾は君からは無服か或は總麻服をつけられるに

過ぎないし、女君は妾に対し無服（不杖期章注）である。妾はその君にとって臣妾であり、君と一体とはなり得ざる者であり、女君が死んで女君を撰ずる場合、君と一体となるかの様に見えても、結局は夫人となつて君と一体となることはないのである。礼記雜記上篇に、女君死則妾為女君之党服、撰女君則不為先女君之党服、とあるように、妾が女君を撰ずる場合、その身分がやや尊であるが故にもはや先女君の党のためには服しない。死亡した女君を先女君と称するのは、撰事の妾が女君の身に匹敵するが故であろうが、鄭玄は事を撰ずるだけで夫人となるのではないと言う。

これに関連して、妾母の子が君となった場合、その母を尊んで先君の夫人と称することが出来るかの大きな問題が、古来、春秋学や礼学の間に存しているのであるが、公羊説、左氏説が夫人と称するを得るとの立場をとり、許慎がこれに従い、穀梁説はこれを非礼とし、鄭玄がこれに従うのであるが、喪服篇總麻章に庶子為後為其母とあって、穀梁説、鄭玄説が喪服礼に合していることは言うまでもない。喪服篇の精神では、妾子が後をついだ時でも子が母を夫人と称することを得ず、妾が女君の事を撰した場合でも女君とはなり得ないことは、適妾の分際を厳にするためであり、妾が女君を撰した場合でも女君と同じくその衆子を尊降することはあり得ない。喪服礼においては妾には体君のことがあり得ないことは、妾が女君を撰した場合、或は女君を継いだ場合の服礼について記されたものがないことを以てしても知られる。故に妾が父母のために期に服するのは体君せざるが故であるとの伝の言葉は半ばは誤りないが、この表現が自ら体君の女君と比例せられるとなれば、半ばは誤りとせられるのであり、体君、不体君の何れともなり得る妾子と比例せられると考えることも亦誤りである。

ハ. 妾子における不体君と体君

妾子は父より受ける喪服が適長子と区別せられるだけで、適妻の衆子とは区別せられていない。妾子であるからとて、適妻と妾とが厳然と区別せられる様な区別は蒙っていない。父の子であると同時に、又、適母の子であることが生まれると同時に規定せられている。礼記喪服小記篇の為慈母後者为庶母可也為祖庶母可也の注に、謂父命之為子母者也、即庶子為後、此皆子也、伝重而已、不先命之与適妻使為母子也、とあり、孔疏引庾氏も、鄭注此一經明庶子為適母後者、故云即庶子為後、謂適母後、此皆子者、此庶子皆適母之子、今命之為後、但命之伝重而已、母道旧定、不須假父命之与

適妻使爲母子也、と言う。故に妾子が君母に対するの服は適子と同じである⁵⁶⁾。かくの如くであるから、適子も庶子も封建制・家族制の内において、父を中心とした秩序の中に組み入れられており、喪服制度の上にもこれが反映せられている。それがつける喪服は、有服・無服、降・不降とも適子と共に父がつける服に従っている。

不杖期章大夫之適子爲妻の伝に、父之所不降、子亦不敢降、とあり、同上章大夫庶子爲適昆弟の伝に、父之所不降、子亦不敢降也、とあり、同上章大夫之子爲世父母叔父母云々の伝も同じく、大功章公之庶昆弟大夫之庶子爲母妻云々の伝には、先君余尊之所庄、不得過大功也、大夫之庶子則從於大夫而降也、父之所不降、子亦不敢降也、とある⁵⁷⁾。ここに挙げた父之所不降子亦不敢降也の父は皆大夫をさして言う。父が天子諸侯であるときは伝は君と称している。即ち、大功章君爲姑姉妹女子嫁於国王者の伝に、君之所爲服、子亦不敢不服也、君之所不服、子亦不敢服也、とあり、喪服記公子爲其母練冠云々の伝にも略同じ文がある。

妾子が適子と区別せられて、その受ける喪服も区別せられるとはいえ、共に父の子であり、適母の子であるから、適子或は適孫がないか、それ等があっても故あって家統を継ぐことが出来ないときは、庶子が父の後となる事が出来る。総麻章に、庶子爲父後者爲其母、とあり、喪服記に、庶子爲後者、爲其外祖父母從母舅無服、とあるのがこれである。妾子の母が適妻と厳然区別せられて正君となる事が出来ないのと異なる。

二、妾母と妾子との、夫家・父家における位置の相違

妾子にとって、母は宗廟中心の適長子相続に基く父系家族制下では、己一個人の母親たるにすぎず、従って私親である。家族宗教の中に受け入れられたものではない。宗廟の中においては妾のための廟がない。故に妾が死ぬると妾祖姑に耐するとせられるが、廟がないから耐するには壇を爲ってなされる⁵⁸⁾。私親とは己の親族で、しかも己の父家、夫家の廟に収納せられないところのものである。齊衰杖期章出妻之子爲母の伝に、出妻之子爲父後者、爲出母無服、伝曰、与尊者爲一体、不敢服其私親也、とあり、総麻章庶子爲父後者爲其母の伝に、何以總也、伝曰与尊者爲一体、不敢服其私親也、とあり、大功章大夫之妾爲君之庶子女子嫁者未嫁者爲世父母叔父母の注に、旧読（中略）下言爲世父母叔父母姑姉妹者、謂妾自服其私親也云々、と

ある等、何れも左様である。妾子は父に従って服するものであり、而も母は己の私親たるにすぎないものであるから、これがために本服を遂げることが出来ない。己が父後となり、父と一体となった場合は総麻であり、これは絶服にも等しい。総麻章の伝も、宮中に死する者があれば他族でも総麻に服すると言っている。妾母はその女君に従って服するものであり、女君が妾子を降すからそれに従って降すべきであるのに、己の子にのみはこれに従わないのは、女君がその子に対して尊降するのと同じく己もその子に対して尊降すると見られるおそれがあり、適妻の分を厳にしようとのためである。唯、妾がその子を降さないことについて、伝が、妾不体君の故に爲其子不得降とは言わずして、爲其子得遂也、と言ったのは、適庶の分を厳にするため⁵⁹⁾の他に、妾が夫君家の廟に納められないことの反面に、喪服の上で君に従うの義理がなく⁶⁰⁾、母子の間の情を遂げることを得しめるとの意を表明したものであろう。然し適母と並んで妾母が子に対し降すを得ないと解することがその真を得ているものと言えよう。

2. 舅姑不庄婦について

礼記大伝篇に従服六が挙げられ、その中の有従有服而无服、有従無服而有服、有従輕而重の三つは公子が妻の族に、妻が夫の族に対する喪服に関するものであるが、服問篇では更に詳しく、有従輕而重、公子之妻爲其皇姑、有従無服而有服、公子之妻爲公子之外兄弟、有従有服而无服、公子爲其妻之父母、と記されている。これらにおける喪服を示すと、

公子はその母のために、父存すれば五服外、父没すれば大功、公子の妻は公子の母のため齊衰不杖期
公子はその外祖父母・從母に無服であるが、公子の妻は夫の外祖父母・從母に総麻

公子の妻はその父母に齊衰不杖期であるが、公子は妻の父母に無服

これを要約すると、公子（妾子）は母妻のために庄降せしめられるから、母の族・妻の族に対して無服である（士なら、夫はその外祖父母・從母に対して小功、妻の父母に総麻）。然るに公子の妻は公子の族のために一般に妻が夫の族に服するのと同じである。公子の妻が公子の母に対し夫に従って一等を降すのであるが、これは来嫁婦が夫党の上位世代及同世代者に対する服の原則である。下位世代に対しては夫と同服である。公子はその母のために父存五服外、父没大功であるのに、公子の妻は却って公子の母のためにこの様な降服がない。これは前述したところの、妾子が母のために

降すのに妾母が子のために本服を遂げるを得るという背理的現象と同様の現象である。鄭玄は公子の妻が公子の母に対し降さないことについて、舅不圧婦也、と言う。舅不圧婦であると共に姑不圧婦というものがある。礼記喪服小記篇の婦人不為主而杖者姑在為夫杖の鄭注にこれが見えている。婦が舅姑からの圧降を受けないが故の婦の服は、本来の服と同じであり、舅姑から圧を受けないところの婦とは、特に公子の妻だけを指すわけではない。公子が妻のために圧降を受けるのに対して公子の妻は夫党のため本来服であるというにすぎない。公子が本来服をつけず公子の妻が本来服をつけるため、上述の従服の上での不均斉が生じた。ここでもう一度妾子と妾母との服をみると、妾子が圧を受けて母のために降すのに、妾は子に対して本来の服をつけるのである。

結局、公子、大夫庶子が母妻のため圧降を受けるのに対し、母妻は公子、大夫庶子に対してこの様なことがないのであるから、圧降に対して不圧を如何ほど列挙して見たところで大した意味はないのであり、公子・大夫庶子が母妻に対し圧降を受けるということが数多くの喪服上の不均斉な現象の根源なのである。

V 圧と杖との関係についての鄭玄説に対する疑問

圧の範囲は極めて限定せられたものであり、公子・大夫庶子が母妻に対する服がこれであって、昆弟に対する服については、それが圧であるか否かは甚だ疑問であった。圧に対する不圧はすでに述べた様に⁶¹⁾、祖不圧孫、舅不圧婦、姑不圧婦、君与女君不圧妾、等と言われている。公子・大夫庶子の圧が現われるのは言うまでもなく喪服の上においてであるが、鄭玄の礼記注には、葬儀の上においても杖の使用不使用がこれに関連して現われると理解せられる様な記述をしているものがある。以下これについて検討を加えてみよう。

1. 礼記喪服小記篇、婦人不為主而杖者、姑在為夫杖、母為長子云々、女子子在室為父云々、注、姑不圧婦、について

婦人の杖については喪服篇斬衰章伝に、婦人何以不杖、不能病也、とあり、喪服小記篇のこの文は婦人杖のことを記しているために、両者の関係について諸説紛々であるが、喪服小記篇の孔疏は、「成人の婦人が家にある場合、父母の喪に服する時には喪主とならないのであるが、それでも杖を使用する。出嫁して夫家にある場合は、喪主となる時には杖を使用するが、喪主とならなければ杖を使用しない。ただ、夫と長子と

のためには、喪主とならないときでも使用する。夫のために主とならない場合とは、夫の父母があってそれが喪主となるときである。夫の母（婦にとっては姑）が喪主となれば、婦は姑の圧を受けて杖を使用しないと思われる恐れがあるが、実は姑は婦に圧することはないから、姑が主となっても婦は杖を使用するのである。」と言う。ところで孔疏は、舅が適婦の喪を主るときは適子を圧して杖せざらしめると言うが⁶²⁾、鄭注に圧適子の様な説はない。夫が適妻を降さないのであるからには、父が適子を圧降せしめることはないのである。礼記問喪篇の父在不杖杖矣につき、鄭玄は、父在不杖、謂為母喪也、尊者在不杖、避尊之処云々、と言う。この母は特に父の妻か妾か示されていない。すると母が適であり子が適子の場合も含まれている。父在不杖杖を鄭玄は圧を以ては説いていない。ここにおいて、姑在為夫杖が果して不圧と関係があるのか疑問である。

2. 礼記喪服小記篇、父不主庶子之喪、則孫以杖即位可也、注、祖不圧孫、孫得伸也、について

この鄭注も庶子の子が父の喪において杖するを得るのは庶子の子が彼の祖よりの圧を受けないからであると言う。然し前条の姑在為夫杖が姑在って喪主となるものお不圧によって杖すとせられたのに対し、今は庶子の父が庶子の喪を主らないのであるからには、圧不圧ははじめより問題とならないことなのであり、鄭玄の「祖不圧孫、孫得伸也」は甚だ不適切な解釈と言わざるを得ない。この孔疏に至っては、又、父皆圧子、故舅主適婦喪、而適子不杖、大夫不服賤妾、妾子亦圧而降服、以服其母也、とて、適子・妾子ともに父の圧を受けるのであり、従って適婦の喪に適子は杖しない、と言い、適子の喪に父が主となり杖するために適子の子が杖を以ては位につかないのは、祖を避けるためであり⁶³⁾、父が庶子の喪に主とならないで庶子の子が杖を以て位に即くことが出来るのは、祖が孫を圧しないからである、と言う。庶子の子の杖を祖圧がないからであるとして、圧と杖とを因果の線上におこうとするならば、長子の子の不杖は明らかに祖不圧孫と矛盾する。祖が孫を圧せざるが故に庶子の子が不杖であるのなら、適子の子が不杖であるのは圧であるに由ることになる。

3. 礼記喪服小記篇、世子為妻、与大夫之適子同、注、為妻齊衰不杖、同上篇、宗子母在為妻禫、疏引賀瑒云、父在適子為妻不杖、同上篇、父在庶子為妻以杖即位可也、注、舅不主妾之喪、子得伸也、

儀礼喪服篇齊衰杖期章妻，注，適子父在則為妻不杖，父在子為妻以杖即位，謂庶子，について

妻のためには天子より士に至るまで齊衰杖期であるが，適子ならば父が在るときは父が喪主となるので，適子は不杖，庶子ならば父は喪主とならないので杖することが出来る。適子は諸侯より士に至るまで圧を受けることはない。圧を受けない適子が父在る場合に杖を使用しない（又は杖を持ったままでは喪位につかない）。庶子なら，公子（父在り）は圧を受けて妻のため五服外，公の庶昆弟（父なし）は余尊の圧をうけ降して大功であるから，固より杖はない。大夫庶子は父あるとき父に従って降して大功であるから杖がない。父没すれば齊衰杖期である。士の庶子ならば父在るも齊衰杖期である。父が庶婦の喪の主とならないからである。父が在って而も夫が妻のために杖を使用し得るのは士の庶子の場合のみである。杖を使用し得るのが圧を受けないからであるというのなら，杖を使用し得ない適子は圧を受けることになるが，実は適子が圧を受けることはない。従って杖の使用不使用は圧とは関係ない。

4. 礼記喪服小記篇，庶子在父之室，則為其母不禫，庶子不以杖即位（中略），父在，庶子為妻以杖即位，について

父が存し，庶子が妻のために齊衰杖であるのは士の場合である（大夫庶子ならば大功である）。父の室にあるならその母のために云々と言うのは，孔疏も不命の士の同室の場合であると言う。父在り妻のため云々は父の室に在る時かどうかは記されていない。父室に在ると否とに関わらないものと思われる。すると庶子は父在る時に母のために不禫不杖のことがあるのに妻のためには杖を使用し得る。庶子は母妻のために，公子，大夫庶子ともに圧降を受ける。士の場合には圧降はないが，適子の喪礼と比較すれば貶せられるところがある。喪服小記篇のこの文に庶子云々とある所以である。妾と庶婦とは共に庶子の父は喪主とならないのであり，且，庶子は母妻に対して圧降を受けるのであるから，これに対する杖不杖は両者同様である筈であるのに，実は母のために不杖であるのに妻にはこれがない。すると杖と不杖とは父の尊降より生ずるところの圧とは関係がないことになる。鄭玄は適庶が共に母の喪にあるために庶子が適子に下るのであると言う。けれども適子は，父在るときは父に下って不杖であるから，庶子が適子に下って不杖というのは理に合わない。

以上の四条から，圧と杖との原理はそれぞれ別のものであらうと考えられる。杖について，鄭玄はこの別別の原理を混同して採り上げている。上述の様に喪服小記篇の婦人不為主而杖者姑在為夫杖について鄭玄は姑不圧婦と言ひ，父不主庶子之喪則孫以杖即位可也については，杖不杖の原理を圧で説明しようとしているが，庶子不以杖即位については下適子也と言ひ，雜記上篇の為長子杖則其子不以杖即位については辟尊者と言う。これは問喪篇の，父在不敢杖矣，尊者故也，堂上不杖，辟尊者之處也，に基づいて述べたもので，杖不杖の原理としては，これを探るべきなのである。この尊者を避ける思想は筆者が曩に昭穆制度発生に関して考察したもの⁶⁴⁾に示すように，古くより，家族統率の上での權威の相統の序を確立することが非常に重要視されたが，隣接世代における秩序を確立することが最も重要であった。隔世代たる祖孫間にあっては相統上の争いはまず生じない。祖孫間の親密は古代クロスカズン婚によっても生ずることはあり得ても，これだけに依るのではない。

結 論

儀礼喪服篇大功章の，公之庶昆弟大夫之庶子為母妻昆弟，の条における昆弟については，馬融の旧説と鄭玄の読解とに大きな相違があり，鄭玄は母妻に対するのと同じく昆弟に対する服も圧降大功と見なし，母妻に連属すべきものとした。然し，昆弟が圧降を受けると考えることは，次の諸条よりして肯定することが出来ない。

1. 大夫の子が昆弟に対する服は，適長子に対するものが特別であるの他は，適長子が昆弟に対するの服と適長子以外の庶昆弟が相互にする服と相違がないのであり，「大夫之庶子為昆弟」と特に庶子に限定すべき理由がない。

2. 公の昆弟の場合でも，公の同母昆弟と異母昆弟との間に，昆弟に対する服に相違があるとの明証がない。従って，前項と同じく庶昆弟の庶の字の存在の理由がない。

3. 公の庶昆弟，大夫の庶子の庶字の存在理由は，それらの母妻に対してのみ認められるものである。

4. 圧降服の範囲は，公子・大夫庶子とその私親に対してのみであり，昆弟は私親とは見なされない。

然し，昆弟を母妻の下に連属せしめないで伝下においた場合でも，満足のいく説明をすることが困難であり，諸家の間で，大功章本条の昆弟服の説明に難渋を

訴えるものが多い。近年武威で発見せられた漢簡本においても、昆弟二字がないものがある。

なお、公の庶昆弟・大夫の庶子の庄降服に関連し、妾子が母に対する服と、妾がその子に対する服との間には、大きな不均斉があり、理においても情においても逆順を感じしめるのであるが、これは、庶子が妾母に対し庄降するに拘わらず、妾母はその子に対しては、女君の子及び他妾の子に対し己が女君に従って降す様には降すことを得ない、若し降服するならば己が適と並んで子に対し尊降するとの嫌疑があるので、これを防ぐことによるのである。

最後に、喪服に付随する喪杖の使用と、庄又は不庄とが関係あるかの様な鄭玄の言説があるが、両者の関係はないと言うべきである。

註

- 1) 拙稿、左伝に現われた祖孫相統について（日本中国学会報 第二十集）参看
- 2) 礼経旧説（劉申叔先生遺著）
- 3) 通典 凶礼十四引
- 4) 同上
- 5) 通典 凶礼十三引
- 6) 縵麻章の貴妾について、鄭玄は、此謂公士大夫之君也、貴妾、姪娣也、天子諸侯、降其臣妾無服、と言ひ、又、齊衰不杖期章の爲衆子の鄭注は、大夫則謂之庶子、降之大功、天子国君不服之、と言う。馬融（通典 凶礼十四引）は、天子諸侯も貴妾のために縵服をつけると言う。
- 7) 現行本は此無服無所見也に作ってあるが、段氏経韻樓集（経解本巻二）に述べてあるように此無母服云々に作るべきであろう。
- 8) 説文通訓定声 卷四謙部
- 9) 潜邱劄記 経解本巻一
- 10) 夏變 五服釈例 巻五、庶昆弟領小宗服例参看
- 11) 通典 凶礼十六引
- 12) 礼記 曾子問篇天子練冠以燕居の条
- 13) 潜邱劄記 経解本巻一
- 14) 五服釈例 巻五、釈庄降例
- 15) 礼経旧説（上掲）
- 16) 五服釈例 巻五、釈庄降例
- 17) 通典 凶礼十一引
- 18) 日知録集釈 巻五。章太妃は哀帝の母で、成帝（哀帝の父）の妾である。
- 19) 通典 凶礼十三引
- 20) 通典 凶礼十四引
- 21) 春秋釈例 巻一、母弟例
- 22) 斬衰章父爲長子の鄭注に、庶子者爲父後者之弟也、とあり、不杖期章爲衆子の鄭注に、衆子者長子之弟及妾子、とある。
- 23) 夏變 五服釈例 巻五、釈庄降例参看
- 24) 通典 凶礼十三引
- 25) 通典 凶礼十四引
- 26) 五服釈例 巻四、公之昆弟旁親之降例
- 27) 旁尊とは、尊者の昆弟である。齊衰不杖期章世父母叔父母を伝は旁尊也と称している。黄以周喪服通故一（礼書通故）参看
- 28) 通典 凶礼十四引
- 29) 儀礼喪服文足徴記 巻一
- 30) 左海経辨 経解本巻一
- 31) 読礼通考 巻十二
- 32) 儀礼集説 巻十一
- 33) 儀礼喪服文足徴記 巻一
- 34) 左海経辨 経解本巻一
- 35) 礼経釈例 巻八
- 36) 儀礼喪服文足徴記 巻一
- 37) 左海経辨 経解本巻一
- 38) 胡培壺 儀礼正義 巻二三、曹元弼 礼経校釈 巻十六参看
- 39) 儀礼集説 巻十一
- 40) 喪服会通説 巻四
- 41) 儀礼正義 巻二三
- 42) 礼経校釈 巻十六
- 43) 喪服鄭氏学 巻十
- 44) 儀礼喪服文足徴記 巻一
- 45) 同上
- 46) 左海経辨 経解本巻一
- 47) 儀礼正義 巻二三
- 48) 中国科学院考古研究所編、1964年文物出版社
- 49) 儀礼集説 巻十一
- 50) 儀礼管見 巻十一
- 51) 喪服鄭氏学 巻七
- 52) 儀礼集説 巻十一
- 53) 儀礼喪服文足徴記 巻五、公大夫士妾私親服例説
- 54) 同上書巻五、妾不体君述
- 55) 通典 嘉礼十七引
- 56) 儀礼喪服篇小功章君母之父母從母の伝の注に、凡庶子爲君母如適子、とある。

- 57) 方苞は、独挙大夫之庶子、以適子於母妻不降、庶子従父而降兄弟、則適子之降不待言矣と言う。(儀礼析疑 卷十一)
- 58) 礼記喪服小記篇に、妾祔於妾祖姑、亡則中一以上而祔、祔必以其昭穆、とあり、孔疏に、妾無庶、今乃云祔及高祖者、当為壇祔之耳、とあり、又、雜記上篇の主妾之喪則自祔至於練祥皆使其子主之の孔疏引崔氏も、於庶中為壇祭之、と言う。
- 59) 不杖期章で、妾がその子のために期服を使用し得るのは公妾と大夫妾であり、その父母のために期服を使用し得るのは公妾より士妾に及ぶまですべての妾である、とせられるのは、その子に対する服には母の階級上の尊が作用するか否かが問題であるが故に士妾を除いたのであり、士妾が公妾大夫妾の場合と服を異にするが故ではない。その父母のためには、公妾より士妾までの全てを挙げたのは、初めより服者の階級上の尊は問題にならないからである。
- 60) 喪服記の凡妾為私兄弟如邦人の注に、嫌圧降之也、私兄弟目其族親也云々、とあり、疏に、君与女君不圧妾、とある。妾が自分の私兄弟のために圧降を受けないということは、妾が自らの親族に関しては夫君より喪服上の拘束を受けないことなのである。
- 61) 本篇 II 参看
- 62) 齊衰杖期章為妻の鄭注に、適子父在則為妻不杖、とある。
- 63) 礼記雜記上篇に、為長子杖、則其子不以杖即位、とあり、鄭玄は辟尊者と言う。
- 64) 拙稿、中国古代昭穆制度発生に関する一考察(日本中国学会報 第33集)

Summary

Introduction

In the chapter 'Ta Kung' (very coarse mourning dress) of the volume 'Sang Fu' (mourning dress) in 'I Li', the following statement is made:

Canon says, 'shu' (庶) brothers of the feudal lord and 'shu' sons of high officials put on 'Ta Kung' for their "mothers, wives" and "brothers".

The exegesis argues that these dresses are 'Ya Fu'.

In the above article, the word "brothers" which follows "mothers, wives" was introduced in this text by Tcheng Hsuan (鄭玄) from the top of the next canon of this, so in old canon till Tcheng Hsuan's correction these dresses for "brothers" were not 'Ya Fu'. The writer will discuss whether the dresses for "brothers" are 'Ya' or not, and will, further, discuss the character of 'Ya Fu'.

Main Subject

I. On the 'shu' in the volume 'Sang Fu' in 'I Li':

'Shu' is the direct opposite of 'shih' (適). 'Shih Tzu' (適子) is the name for the eldest son borne by 'shih chi' (chief wife 適妻). The younger brothers of 'shih tzu', both of the real mother and of the stepmother, are 'shu'. Sometimes only sons borne by the wife of the second rank are considered to be 'shu', and this is the case when it is necessary to point out that the mourning dresses put on by them are ones for their mothers who are other than a chief wife.

II. On 'Ya Fu':

The reason why the mourning dresses put on by 'shu' brothers of a feudal lord and 'shu' sons of high official for their mothers and wives are called 'ya' (oppressed) in the chapter 'Ta Kung' is that the fathers of 'shu' brothers don't wear regular mourning dresses but degraded ones for these 'shu's' mothers and wives, and so also these 'shu' must wear degraded ones because of the fathers' pressure on them. There is no

doubt that these dresses put on by 'shu' for their mothers and wives are 'Ya Fu', but it is very doubtful that dresses put on by them for their brothers are also 'Ya Fu'. In the latter case, Tcheng Hsuan considered that the wearing of these dress would be 'Ya'.

III. On whether the mourning dresses worn by brothers of feudal lords for each other are 'Ya Fu' or not:

1. The brothers of a feudal lord put on the degraded dresses for some of their relatives according to their own status and wear the degraded ones for their mothers and wives because of the fathers' pressure on them.
2. The mourning dresses worn by the brothers of a feudal lord for their brothers, sisters, cousins, etc. are similar to the mourning dresses worn by high officials for their brothers and others, because their social positions are similar to each other.
3. The brothers of feudal lords lower the mourning dresses by one step for their brothers of official estate, but for brothers of high official estate it is questionable whether they would wear degraded dresses or regular dresses.
4. The fact that the brothers of feudal lords and the sons of high officials are considered 'shu' in the chapter 'Ta Kung' is reasonable only because they wear mourning dresses for their mothers and wives, and it is unreasonable for their brothers.
5. Wives of second rank are 'Ssu Chin' (relations only to ego 私親) to their sons. The brother-relation between the sons of a wife of second rank is not 'Ssu Chin', so they need not wear 'Ya Fu' for each other.
6. Until Tcheng Hsuan corrected the text of the chapter 'Ta Kung', the word "brothers" which follows "mothers, wives" was placed at the top of the next canon of this, and so dresses for them were not 'Ya Fu'.
7. If so, the word "brothers" in this article hasn't any significance, because the mourning dresses put on for them are mentioned very often in some of the other articles in the volume 'Sang Fu'.

IV. On the fact that the mourning dresses worn for wives of second rank and daughters-in-law are not 'Ya Fu'.

1. Although the sons of wives of second rank of feudal lords and high officials put on 'Ya Fu' for their mothers, the wives of second rank don't degrade the dresses for their sons. If the wives of second rank degraded the dresses, they would rival the chief wife in nobility.
2. Although the sons of wives of second rank of feudal lords put on 'Ya Fu' for their mothers, their wives don't degrade for their mothers-in-law. It is because parents-in-law don't put on 'Ya Fu' for their daughters-in-law.

V. On the questioning of Tcheng Hsuan's opinion on the connection of 'Ya Fu' with mourning sticks.

Conclusion

1. Four reasons to infer that the mourning dresses put on by 'shu' brothers of feudal lords and 'shu' sons of high officials for their brothers are not 'Ya Fu'.
 - a. There is no difference between the mourning dresses put on by the eldest brother and put on by younger brothers for their brothers (except for the eldest brother) when they are sons of high officials.
 - b. In the case of the mourning dresses put on by the brothers of feudal lords to each other, there is no difference between the dresses put on by sons of real mother to each other and put on by sons of stepmother to each other.
 - c. It is necessary only for mothers and wives to point out 'shu' with regard to mourning dresses.

-
- d. The extent of relatives wearing 'Ya Fu' is limited to 'Ssu Chin', and brothers are excluded from this custom.
 2. Wives of second rank are not required to wear 'Ya Fu' for their sons, because otherwise they would rival the chief wife.
 3. There isn't any connection between mourning sticks and 'Ya Fu'.